

V

5-1 ジャガノートに乗って

ジャガノート＝ある程度まで乗りこなすことができるが、突然暴走して解体するおそれもある現代社会のありかた・モダニティ

「モダニティがわれわれにもたらす危険性を最小限にとどめ、好機を最大限に生かすかたちでこのジャガノートを統率することができるのであるか？…なぜ「口当たりのよい理性」の普及は、われわれの予測や統率にしたがう世界を生み出せなかったのだろうか？」 p188

↓いくつかの要因↓

① 《設計ミス》

抽象的システム（社会化された自然と社会的世界のとの架け橋となり、また我々のローカルな時空間からの脱埋め込みをももたらしているシステム）

モダニティと不可分な抽象的システムにおける設計ミスがあるのではないか？

所定の目標を達成できるか、という観点から原則的に査定していくことが可能だが、それは複雑で困難な状況をともなっている。

② 《操作員ミス》

人間が関与する限り、必ず存在する根絶できないリスク。

システムが適切でもその運営者が誤りをおかせばシステムはうまく作動しない。

③ 《意図しなかった帰結》

地球社会を構成しているシステムや行為は複雑なため「システムがいかにかにうまく設計され、操作員がいかにかに有能であっても、そのシステムの導入とその働きがどのような帰結をもたらすのかについて、他のシステムの及ぼす影響や人々との活動全般との関係性のなかで完全に予測することは不可能である。」 p190

④ 《社会的知識の再帰性》＝《循環性》

「社会的世界の特質や機能に関して新たな知識が投入されていくため、決して安定不変の環境を形作ることはできない。新たな知識は社会的世界をより透明度の高いものにするだけでなく、社会的世界を変質させ、いまだかつてない新たな方向に送り込んでいく。」 p191

※ただしこれらが見解は利害関心・目的が各地域の人々においてすべて同質的であると想定

している。しかしそうした同質性は人類全体に関してみれば明らかに当然視できない。世界は権力の不平等によって根底から分裂しているが、権力の偏在と価値観がはたす役割もまた重要である。

「モダニティの最も特有な性質のひとつは、経験的知識の進展がかならずしもそのままでは単なる価値態度間での意思決定を許さない、という発見である。」 p191

5-2 ユートピア的現実主義

重大な帰結をもたらすリスクを最小限にとどめることは、すべての価値観を、また権力の排他的分化を、超越したことがらである。

そのための《ユートピア的現実主義》というモデルの創造

現実主義的思考

「二十世紀の今日、結果を保証しない批判理論はどのようなかたちをとるべきであろうか？」
→ 「《社会的感性に満ちた》ものでなければならぬ」 p194

＝（モダニティが未来に向けて恒常的にひらく）制度に内在する変容に敏感であること
＝現実主義的思考・戦術

「望ましい社会変動を実現化する手段は、かりにそれが制度に内在する変動の可能性と結びついていかなければ、実質的にほとんど影響力をもたないとするマルクスの示す公理に、われわれもしたがわなければならない。」 p193

ユートピアの諸次元

①解放の政治学⇨自己実現の政治学 という軸（「～からの自由」⇨「～への自由」）
《解放の政治学》＝不平等や隷属からの解放に関心を寄せる徹底的な社会参加
《生きることの政治学》ないし《自己実現の政治学》＝すべての人のために満ち足りた、また納得のいく生活を送ることができるとして可能性を促進しようとする、徹底的な社会参加
この両者が結びつくべきであるという認識。

「モダニティに特有な点は、自己実現が自己のアイデンティティの基盤になっていることである。」 p195

②ローカル⇨グローバル という軸

「一人ひとりの利益と地球全体の組織化との調整こそが、最大の課題である。」 p196

ユートピア的現実主義

重大な帰結をもたらす様々なリスクの認識→現実的戦略→《望ましい社会のモデル》の創出
ただしユートピア的思考と現実主義とのバランスを厳しく保つ必要
「危険性を最小限にとどめることが最優先の目標であるという認識によって抑制」 p194
しなげればならない。

なお、「こうした判断は、モダニティの及ぼす影響がいまだ比較的弱い領域にも、おそらく当てはまる。」

5-3 未来への方向づけ—社会運動の役割

社会運動の重要性

「社会運動は、起こりうる未来を垣間見せてくれ、ある面ではそうした未来を実現させるための媒体手段でもある。」 p211

かつてよりあった社会運動 [労働運動、言論の自由・民主化を求める運動]

→近代特有の社会運動 [平和運動、エコロジー運動]

「しかし、ユートピア的現実主義の視座から見た場合、社会運動は、もつと安心でき、もつと人間性にかなった世界にわれわれを道案内する社会変動の、不可欠な基盤でも、唯一の基盤でもない点を認識することがきわめて重要になる。」 p211→「ユートピア的現実主義の見地は、権力の存在が不可欠なことを認め、権力の行使を本来的に有害なものとは考えていけない。」 p212
「権力は必ずしも常に党派の利益のために利用されるわけではないし、抑圧手段として使用されるわけでもないため、したがって現実主義は、依然として権力の中心的要素を構成している。」

5-4 ポスト・モダニティ

われわれはポスト・モダニティという概念になにか明確な意味を付与することができるのであろうか？

ポスト・モダニティのユートピア的解釈

モダニティを「凌駕する」展開を表象するものとしてのポスト・モダンのシステム

資本主義・監視・軍事力・工業主義

→ポスト稀少性システム・多元的な民主的参加・非軍事化・科学技術への人間性の付与

①資本主義→ポスト稀少性システム

資本主義でも統制経済でもない新しい経済システム

→下位の部署が「現場から」おこなう詳細な情報伝達による計画経済

=地球規模で一元化された《ポスト稀少性システム》

(一元化された世界秩序、戦争の超克、社会化された経済組織、地球環境介護システム)

「主要な生活財はもはや不足しなくなれば、市場の尺度は、広範囲に及ぶ剥離状態を維持する手段としてではなく、もっぱら情報伝達装置として機能することができるからである。」 p206

② 監視と管理的権力→多元的な民主的参加

「国民国家より下のレヴェルで新たな形態の地域組織が増し、国民国家の位置づけが変化している点を考え合わせれば、新しい民主的参加の形態が今後ますます出現していく傾向にあることは、当然考えられる」 p208

職場や地域団体、メディア組織、多国籍的集団での民主的参加を求める圧力

国民国家より上のレヴェルもつと一元化された全地球規模の政治秩序の出現

それぞれの国家による全地球規模の政策の確立、紛争解決のための協調戦略など

③ 軍事力→非軍事化

「戦争という手段が重要性を失う世界に移行する可能性は、ほとんどないようにおもえる。」 p209

しかし「戦争のない世界は、地球社会における国民国家の位置づけの変化だけでなく、戦争の工業化過程それ自体のなかに内在している」 p209

「戦争のない世界をこころに想い描くことは確かに非現実的であるが、決してまったく現実性を欠いてはいない。」 p209

④ 技術革新

科学技術に人間性を付与するためには、人間と創出環境との間の、今日主として「道具的な」関係のなかに倫理の問題を持ち込むことがますます必要になる」 p211

「世界全体の生態系を健全な状態で保護しようとする、包括的な地球環境介護システム」

p211

(「ガイア仮説」地球環境の介護はひとりの人間の健康を守ることに似ている?)

ポスト・モダニティの二つ目の解釈→重大なリスクの帰結となった社会

全体主義権力の増大

核戦争や大規模戦争

経済成長メカニズムの破綻

生態系の荒廃や惨禍

VI

近代は西欧的企てか？

モダニティの重大な特徴→《国民国家》《体系的な資本主義生産》は西欧近代に特有のものである。

しかしモダニティのもたらした重要な帰結であるグローバリ化は西洋に特有のものではない以上、モダニティそのものも西欧特有ではありえない。

「こうした今までないかたちの相互依存性や意識の問題に取り組んだり、対処するため方法は、当然、非西欧的環境に由来する概念や戦略を必要としていくであろう。」p216
ただし、モダニティにおける知識の再帰性という特性はある程度西欧に特有のものである。
←再帰性に内在している伝統からの徹底的な転換がある特定の文化（西欧文化）に根ざしている可能性

理路整然たる討議は文化的差異を超越した基準に根ざしているため、この問題を解決できない。

結論的所見

・われわれはハイ・モダニティの時代に突入しており、伝統のもたらす安心感や特定の権力による不自由から解放放たれてきた。

・近代においては、知の主張は本来的に循環する＝再帰性

・モダニティは本質的にグローバリ化をとまなう。グローバリ化は外向的傾向があるだけでなく内へのグローバリ化を伴う。

・ポスト・モダンの主張は文化や自我の中心性の崩壊を唱えるが、それはグローバル化によってうみ出された「目の前にあるものとならないものが混在する世界」に生きることの経験に起因する。

・モダニティは本来的に未来を志向するため「ユートピア的現実主義」（未来に対する希望⇨現行制度分析）というモデルが有効足りうる。

・ポスト・モダンの世界では社会的世界の存在論的安心感の基盤が再び重視され、時間と空間の徹底的な再編成が行われる？

付論>モダニティと理想社会

・社会主義者達は「近代の時代的性質」=「資本主義」と認識したが、「近代の時代的性質」（=モダニティ）はもっと広範囲に分析されるべき対象であり、社会主義論者たちは労働運動以外の運動にも着目するべきである。

・モダニティは資本主義を含む4つの特質をもつ。

資本主義、工業主義、一元化された管理的権力（国民国家の監視）、軍事力

・社会主義がユートピア思想として嫌った未来志向は、現代でも「歴史の終わり」という概念であまり好かれていないが、現代に問題がある以上「《新たな》ユートピア的理想主義」が必要とされる。

=近代の力学を凌駕する《ユートピア的現実主義》

・《ユートピア的現実主義》をモダニティの各次元にあてはめると、

① 軍事力に関して言うと、大規模戦争の及ぼす不利益の予想があまりに大きくなったため、その恐れは低減しつつある。しかしリスクがゼロになることはない。

② 全地球規模の政治的統合による所も含め、一元化された管理権力の復活する恐れは消え去ることはない。しかし各《民主》国家内のローカルで多様な集団による民主化運動の成果を信じることはできる。

③ 誰にも取り返しのつかないレベルで生態系破壊が起きるというリスクと、人間と自然との関係が根本的に転換されて「環境倫理」に基づいた「地球にやさしい」システムが創出される可能性。

④ 資本主義でも従来の社会主義でもない「唯ひとつの途」（市場と国家の限定された介入を結び合わせたもの）と、その向こうに現れるポスト稀少性経済秩序の可能性。「社会主義という名称を、人類がみずからのもつ資源を責任をもって管理することに共同で扱うべき関心を言い表す用語として、おそらく規定し直すべきである。」p240